

川越仙波川岸 水運回漕店引き札

(資料：個人所蔵 写真提供：川越市立博物館)

# 近世の舟運

## 物流ネットワークの発達史

江戸後背地の西から東から、下らないもので  
江戸の日常を支えた

荒川・新河岸川・綾瀬川など

2025.11.13大人浦和塾

# 人馬は街道、荷は水路

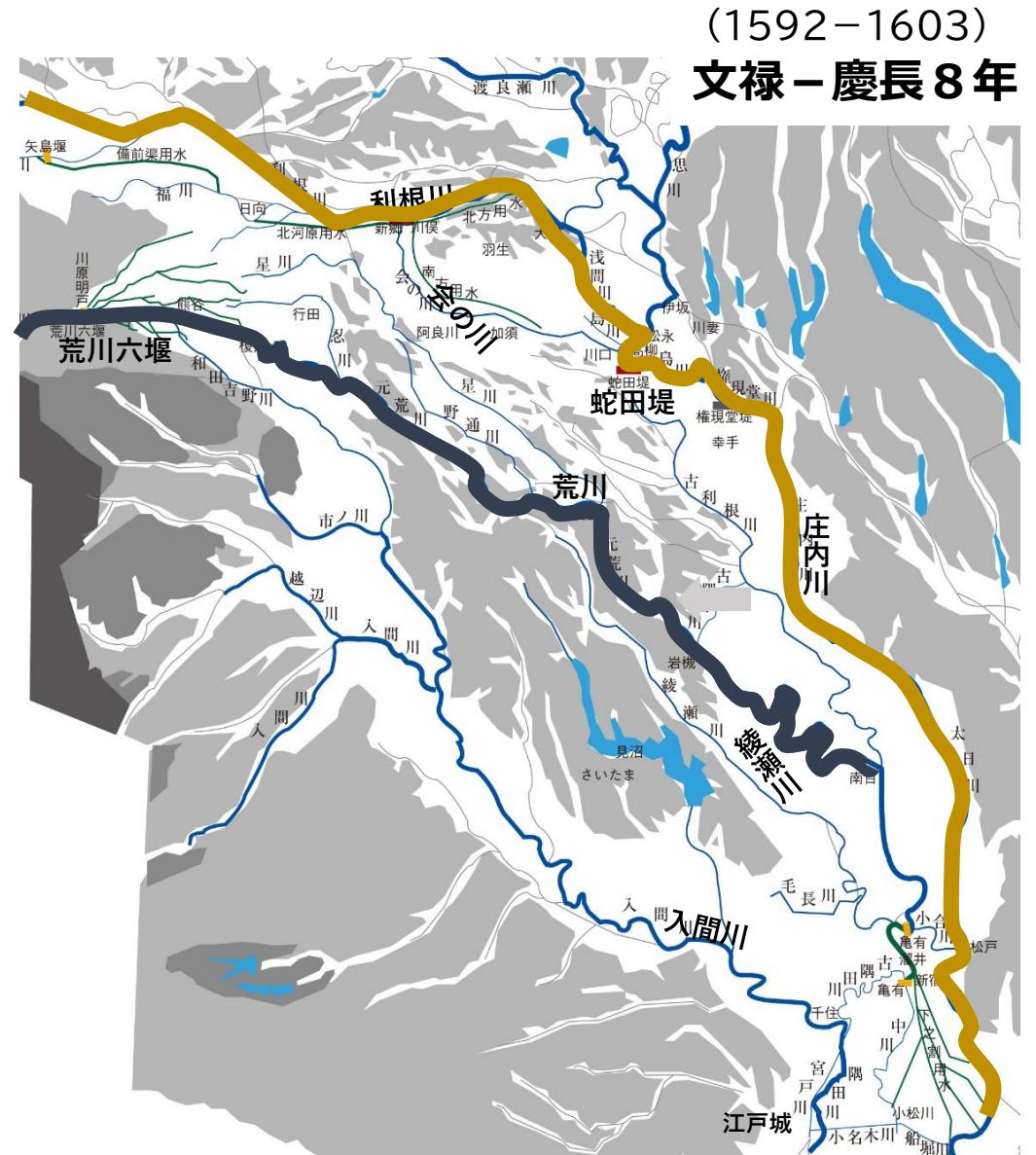
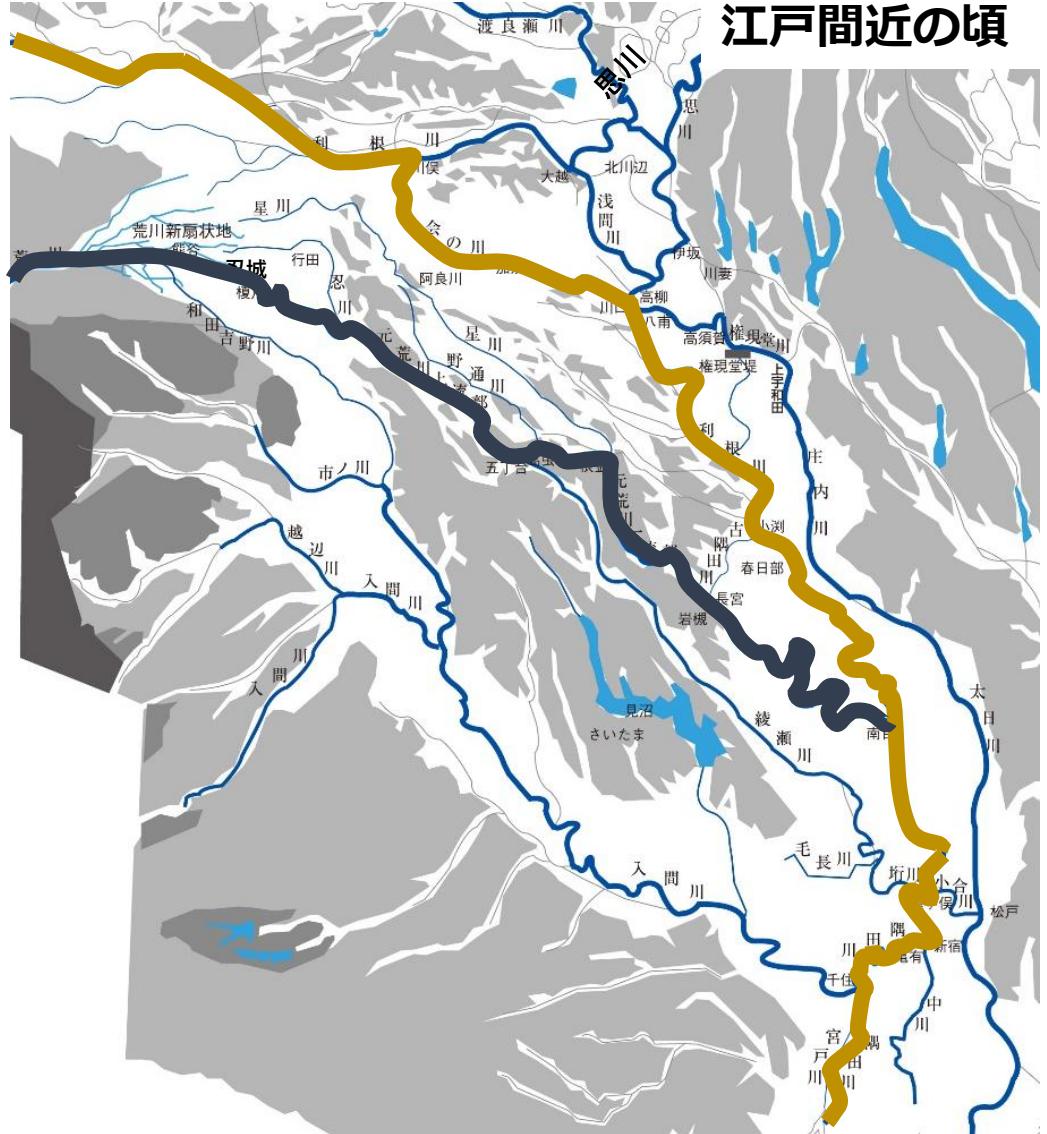
江戸時代、舟運を物流路としたのは、物資の大量移送を掌握する軍事的政策からだが、車輪交通のない時代の有効な物流手段だった。陸上輸送では馬1頭に馬子1人で米2俵しか運べないが、舟運なら中型の高瀬舟に3人の乗り組みで300～400俵運べた。

埼玉県は県土の約4割が低地で、利根川・荒川を軸にして、用水路と排水河川が網目のように広がっていたので各地に舟運用の河岸場もできた。しかし用水路は期間限定のため、年貢米と土物野菜の御用荷物が主な積荷だった。

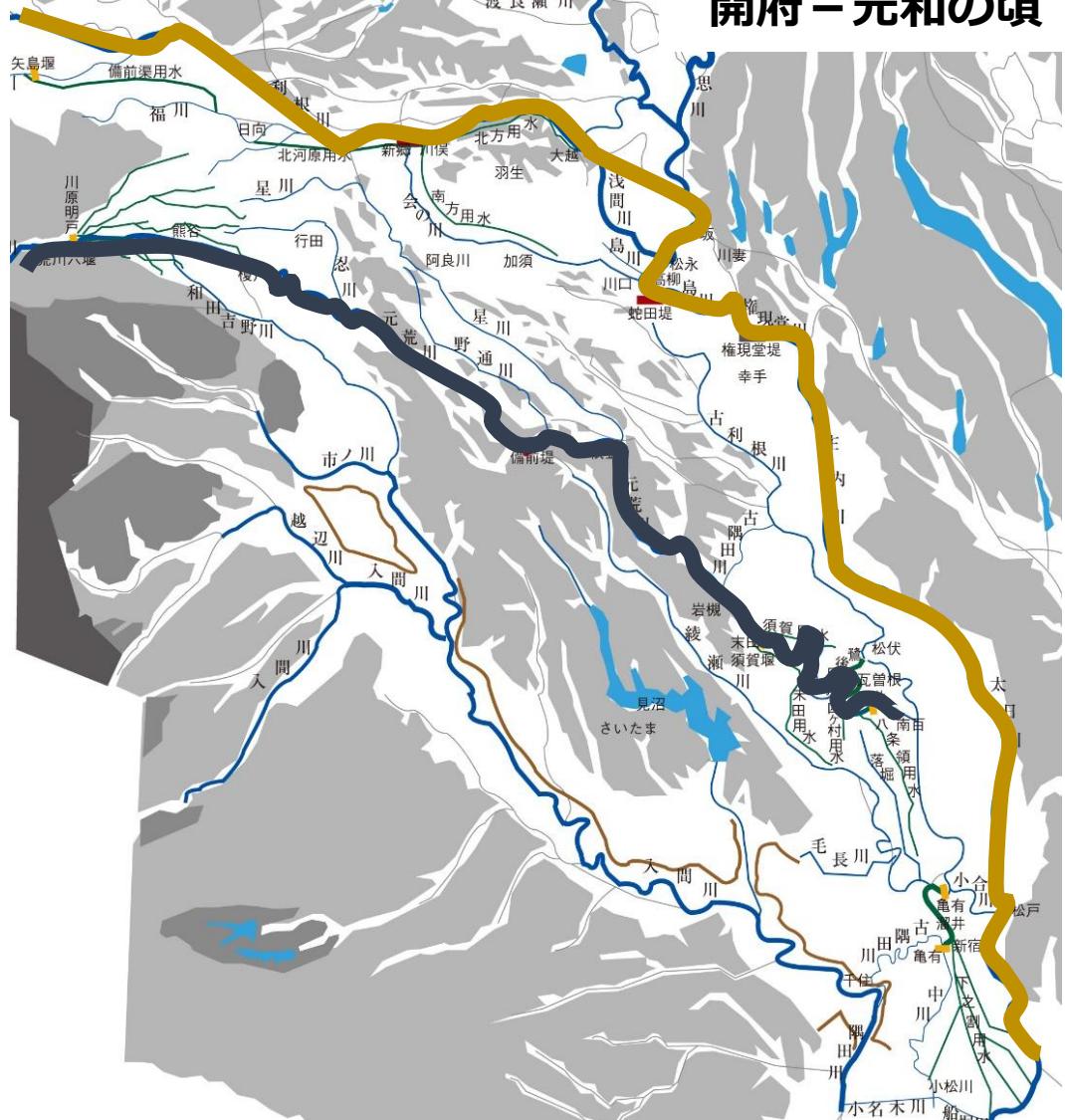
その中で、江戸と後背地を結ぶ本格的舟運路として整備されたのが、「新河岸川」。



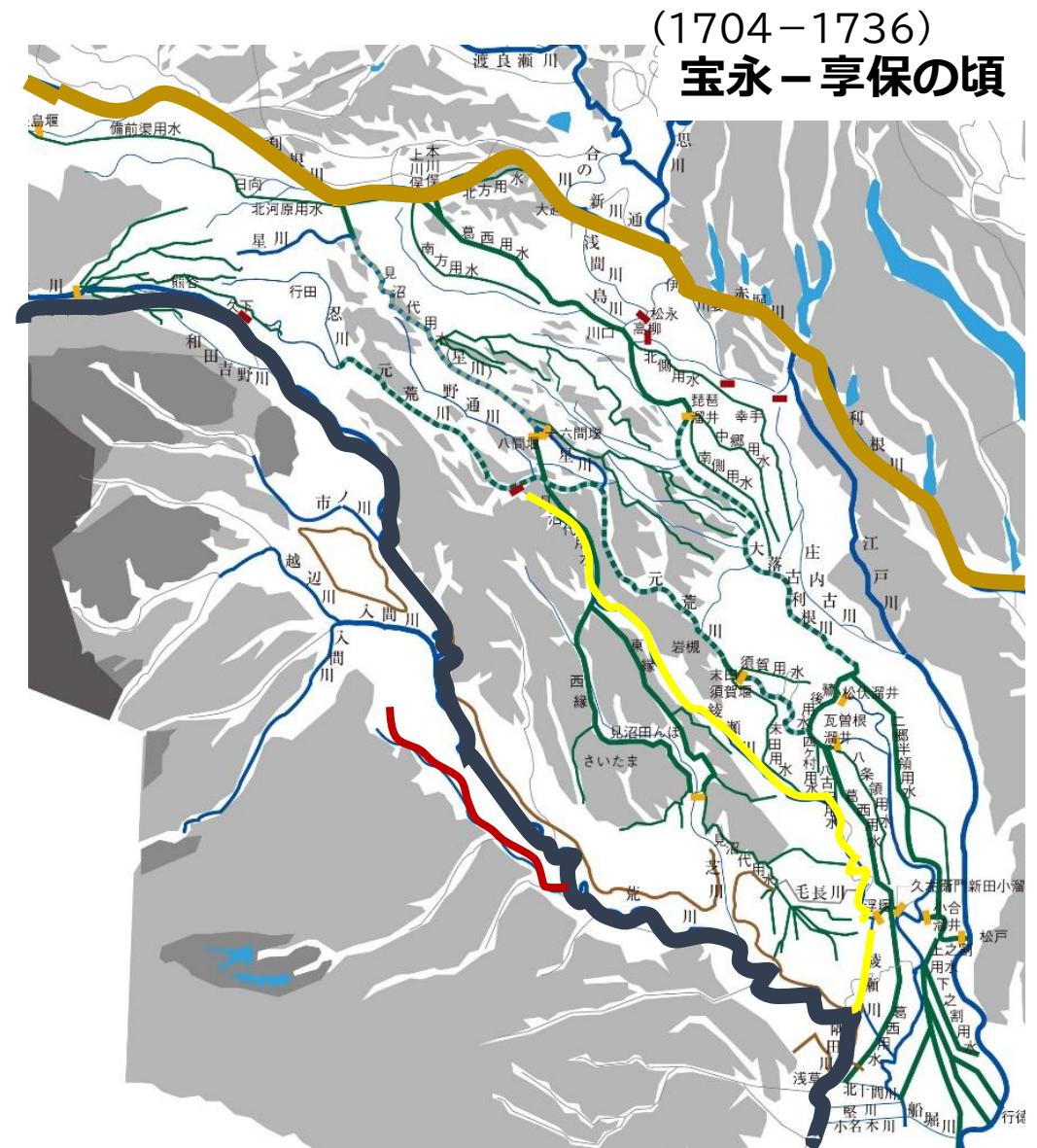
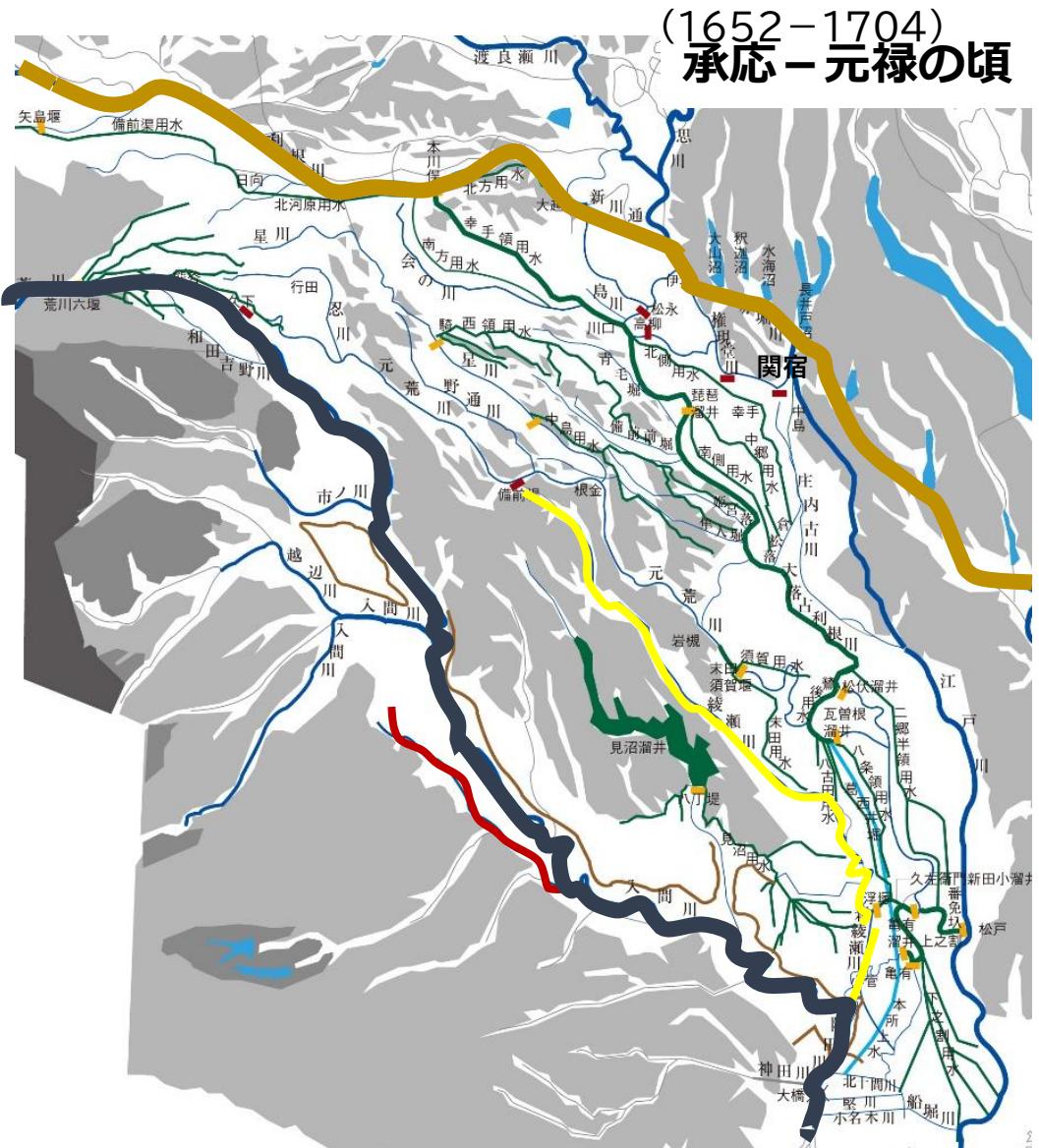
# 水路網整備1 (江戸時代直前-開府)



# 水路網整備2 (開府一元和一寛永一正保)



# 水路網整備3 (承応一享保)



# 利根川東遷・荒川西遷の目的

## ■利根川東遷事業

- ・利根川洪水は常陸川筋から銚子へ、普段の水は用水路を往く。
- ・河川下流部は感潮河川。利根川の水を江戸周囲の村々に送る。



## ■荒川西遷事業

- ・入間川筋に荒川の水を入れ、後背地西方の舟運路として新河岸川整備。

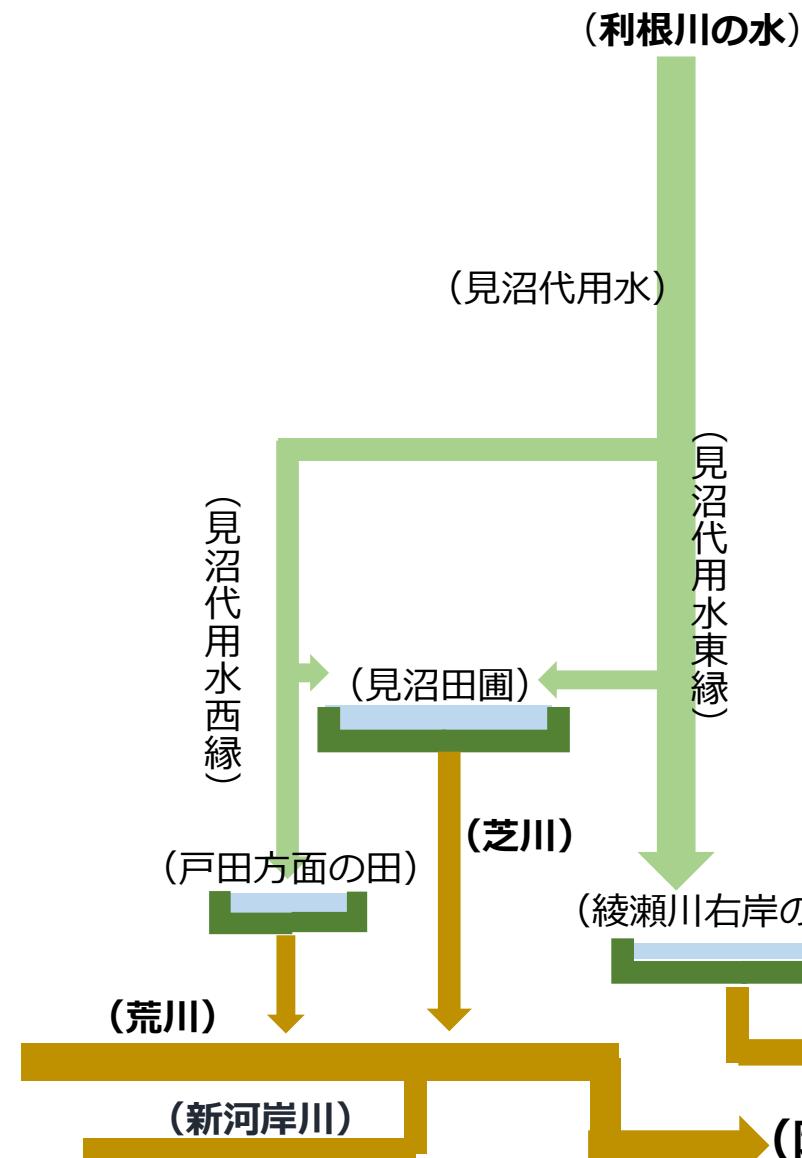
## □新綾瀬川整備

- ・葛西用水と見沼代用水の排水を新綾瀬川に集める。
- ・綾瀬川「堰上げ禁止」と「花畠運河」で後背地東方の舟運路。

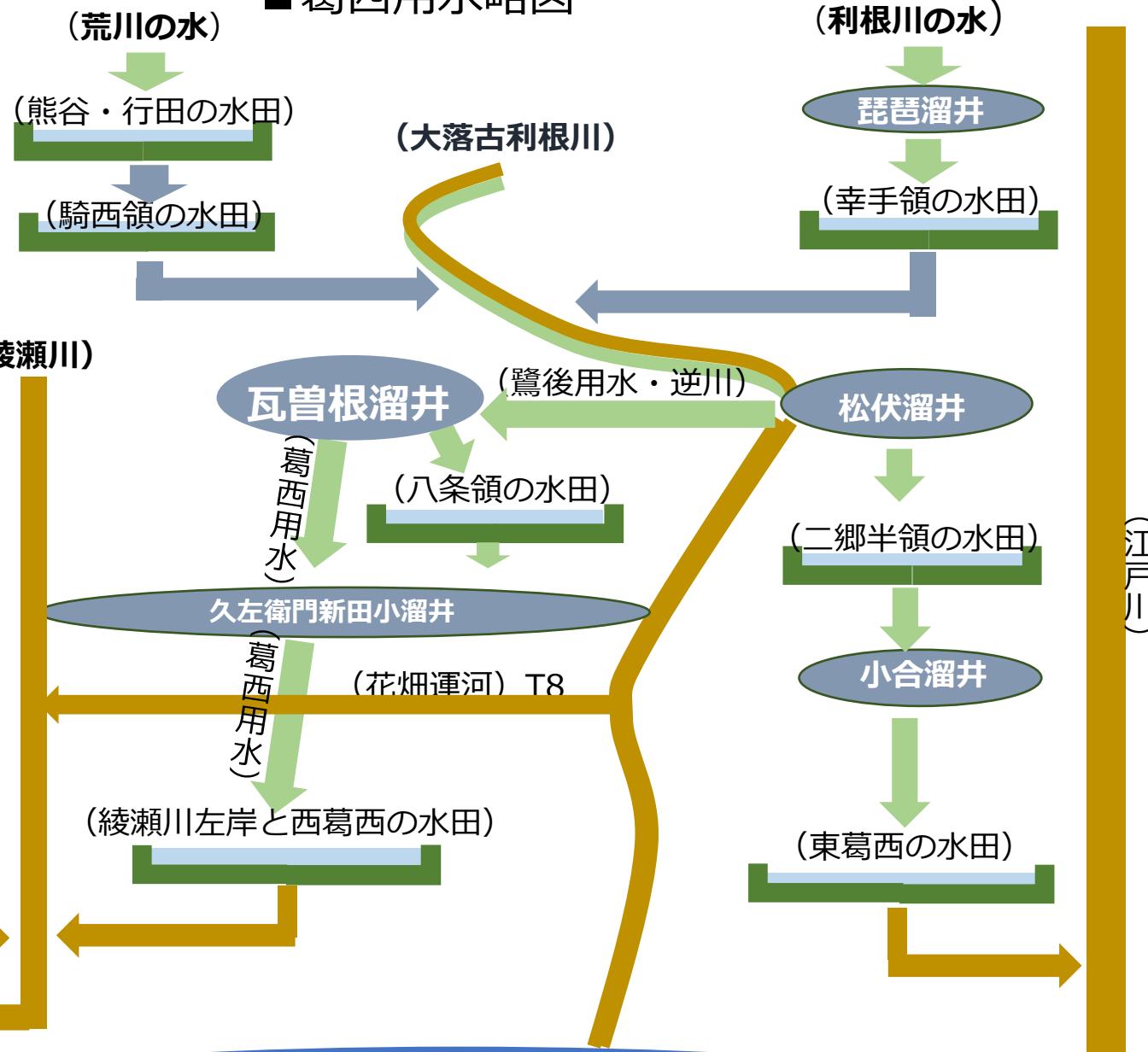
## □後背地からの荷船の集積地は隅田川

- ・江戸後背地西から、東から荷が隅田川に集まる。
- ・江戸後背地からの「下らない物」と江戸湊に届く「下り物」が江戸を支え、江戸は百万都市に。

## ■ 見沼代用水略図



## ■ 葛西用水略図



## 江戸後背地西からの舟運路

# 新河岸川舟運

新河岸川に舟運が本格的に開始するのは、一六三九(寛永一六)年に松平信綱が川越藩主になつてから。信綱は水路を蛇行させて水位を確保し、河岸場を設けた。川越舟運開業は一六四七(正保四)年。

舟の種類は不定期便の「並船」、乗客も運ぶ  
屋形船の「早船」、一往復三、四日かかる荷  
船の「急船」、特急便の「飛切船」。

舟運初期の荷は、御用荷物と年貢米。  
次第二十音二段一二等など、  
丹の舟に腰が立つて一船先の高い高瀬

土物野菜が多くなる。その他味噌・醤油・漿・炭など。青菜の記録はない。

これら産物は、秩父や信州、甲州方面からも運び込まれた。

河岸には船問屋、蔵が並び、乗客や船頭相手の食べ物屋、宿で賑わつた。

客乗せの川越夜船は三時頃川越を発ち、一七時間ほどで翌朝千住の河岸に着く。

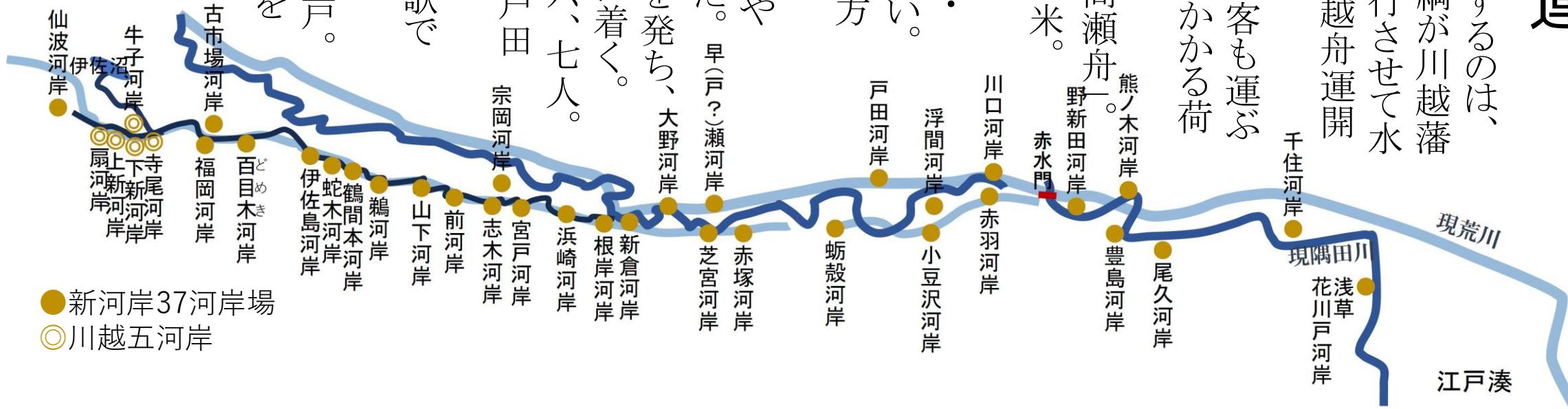
内川では竿を使い、荒川に出ると戸田  
のいわ丸を立て丸を二ざる。

そこはちようど夜の白む頃、川舟歌で  
眠気を覚ました。

川越舟運のターミナルは浅草花川戸  
客を降ろし、迎えるもやい船に荷を

移し、江戸からの荷を積む。  
浅草寺に参つて帰帆につく。

川越舟運は幕末も近い文化文政の頃、最盛期を迎える。



# 年表

文禄元(1592)	利根川東遷事業始まる。利根川下流に龜有溜井造成と東葛西下ノ割用水開削
元和 7(1621)	「新川通」開削。
寛永 6 (1629)	荒川瀬替え＜荒川西遷＞
<b>寛永期 (1623-1644)</b>	<b>綾瀬川、内匠新田(花畠)→小菅、新流路開削(新綾瀬川)</b>
<b>正保元 (1644)</b>	<b>伊佐沼-新倉、新河岸川整備開始</b>
<b>正保 4 (1647)</b>	<b>川越舟運開業</b>
承応 3(1654)	利根川東遷事業完了
<b>延宝 8 (1680)</b>	<b>新綾瀬川大規模改修(小菅→隅田川直線化、堀切→四ツ木放水路開削 綾瀬川堰上げ禁止(以来、綾瀬川排水専用河川に)</b> ＜東西葛西を含む武藏国東部低地の利根川利用の用水系完成＞
宝永元(1704)	利根川決壊。武藏東部低地泥水に埋まる。
享保 4(1719)	埼玉葛西用水完成
享保 6(1721)	町方人口調査50万を超える、武家推定人口50万、 <b>江戸百万都市</b> に
享保13(1728)	見沼代用水完成
享保15(1730)	東京葛西用水完成
<b>享保16(1731)</b>	<b>見沼通船堀完成</b>
宝暦-天明(1751-88)	第二期「江戸町人文化 開花期」(日本料理の発達/鳶谷重三郎の世界)
<b>文化-文政(1804-29)</b>	<b>第三期「江戸町人文化 煙熟期」(料理茶屋全盛/八百善ほか)</b>

後背地からの舟運が江戸の食文化を支え、  
文化文政期、江戸は町人文化の爛熟期を迎えた

文人墨客：山東京伝、太田南畝、谷文晁、酒井抱一、龜田鵬斎、  
渡辺華山、葛飾北斎、…

料理屋 : 八百善、平清、葛西太郎、百川、…



文化初年頃の大川(隅田川)辺り風景/台東区立台頭図書館蔵



幕末期の「下戸・上戸左右鏡」  
上戸は料亭の類。下戸は瑕疵やそのほかの食べ物屋  
/東京都中央図書館特別文庫室



「八百善の常連」酒井抱一、亀田鵬斎、谷文晁、太田蜀山人/鍬形董斎筆